

農村情報ネットワークを活用した「観光林業」の可能性

The Potential of "Tourism Forestry" with Information Networks in Rural Areas

西村 和海*
(NISHIMURA Kazuumi)

I. はじめに

観光客に、農作業の体験又は見学を行ってもらい「観光農園」なるものがある。農作物の生産に加えて体験・見学からも収益を上げられるのはもちろん、それらの活動に伴う、飲食物・宿泊の提供なども同時に行うことができる。

ところで、日本の国土面積は3分の2が森林であるが、その活用と保全を担う林業従事者は年々減少の一途を辿っている。理由として、人口減少に加え、職業として魅力を感じる人も減っているのかもしれない。

私は、大学に入学して参加したサークル活動の一環で数回ながら山に入り、非日常的林業体験を楽しんだ経験がある。林業を取り巻く環境は厳しいのかもしれないが、この体験はエンターテインメントとして提供できる可能性があると思っている。

今回私は、林業を行う中でネックとなりうる安全性や、DX化が進んでいないことによる非効率性といった点を、農村情報ネットワークによって改善し、「観光林業」を運営するイメージを考えることにした。

II. 観光ツアーの解説

今回は、都内在住・在勤者をターゲットに、青梅や奥多摩の山で体験してもらう想定で説明する。

まずは SNS や動画共有サイトなどで、観光林業を知るところからスタートする。その後興味を持ってもらえたら観光林業の体験に申し込む。都心から山まで多少距離があるため、ツアー用のバス内で作業に関するレクチャーを行い、移動の時間を上手く使えるように工夫している。その後、実際に林内に入って作業を行う。作業内容によって形態はだいぶ異なると考えられるが、基本的にはインストラクターの指導の元、安全に体験しても

らえるような内容で行う。

III. 農村情報ネットワークの活用

こうした観光林業において活用の幅が広い農村情報ネットワークは活用の幅が広いと考えている。例えば、山のどこでもインターネットが通じれば、体験の様子を SNS に投稿してもらうことが可能になるだろう。運営者側もライブ配信などを用いて観光客とのリレーションを維持できるかもしれない。

技術的・法整備的には時間がかかりそうだが、自律制御型のドローンを使って安全を見守ってもらうこともできそう。せっかくいいカメラが付いているので、記念写真・映像撮影にも活用したい。

ネットワークが使えるようになることで、各種センサーを配置し体験の安全性を高めることができると考える。例えば土壌水分センサーを使って降雨後の地滑りリスクを見積もったり、生体センサーやカメラを使って野生動物をモニターしたりできる。

IV. 今回の反省と今後の展望

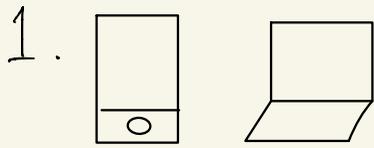
今回、未来図の作成に辺り、しっかりした時間が取れずメモのような結果になってしまった。せっかくなのでもう少しわかりやすい図や説明を作りたい。

また、大学の先生や林業サークルでしっかり活動している学生からフィードバックをもらうことすらできなかったことも今後の課題である。

他には、今回は「観光としての林業体験」をどうやって提供できそうか考えたが、「副業としての林業」についても考えてみたい。1日単位で農業のアルバイトを探せるアプリもいくつか見かけるが、観光の一步先に副業として林業を行う人が一定数いれば、多少は日本の林業の持続可能性を高められるかもしれない。

*東京農工大学農学部地域生態システム学科2年

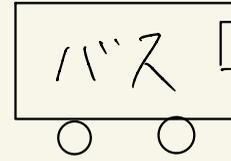
キーワード 農村情報ネットワーク、林業、観光



スマホ・PCから

1. 観光林業を知る
2. 体験に申し込む

2. 当日



- ・山に向かうバス内でインストラクターから講習を受ける

3. 山に入ってから



- ・インストラクターに適度に指導してもらいながら、林業体験を行う。
- ・無線局があることで、体験をSNSで共有してもらえる
- ・作業に慣れた観光客には自由に行動してもらえるようにしつつ、自立制御型ドローンによる定期的な見守りを兼ねた記念写真撮影サービスの提供
- ・土壌センサー等を用い、近辺の安全性を常時モニタリング